異文化理解科目（英語）A　　第一週講義資料

イントロダクション

＜授業のポイント＞

初回にあたる今週は、授業のために必要な各種設定を行い、授業の進め方についての説明をお聞きいただきます。また協力して発表を行うグループの編成も行いますので、来週からの授業に備え、話し合いをしておいてください。

１．コンピュータの設定　（別に配布するマニュアルを参照）

・ネットワーク接続設定　・Google アカウント設定　　・Java の設定

・Open Office のインストール

２．授業で使用するサービス等について　（別に配布するマニュアルを参照）

・大阪大学授業支援システム WebCT　・Google（Gmail、Document）

・Open Office の Impress

３．授業の進め方について　（**資料１**）

・授業のテーマや進め方、成績評価などについて解説します

・購読用のテキスト２種類を配布します

４．グループ編成と打ち合わせ　（**資料２**）

・簡単な自己評価アンケート（**資料２**）に答えていただき、それを元にグループ分けを行います

・次週からの作業の準備のため、グループで打ち合わせをします（リーダーの選出、連絡先の交換、Google のグループメンバー設定など）

５．自己紹介用の資料作成

・次週実施予定の自己紹介のための、発表用資料を作成します

・Google Document のプレゼンテーション機能や Impress を使いながら、各自資料を作ります

６．その他　　（**資料３**）

・次週までにやっておくべきことを指示します

・時間があれば、授業テーマについてのディスカッションを行います

資料１　授業の進め方について

１．授業の目的

異文化理解科目（英語）A は、**英語とコンピュータを活用した文化研究のノウハウを学ぶ**ことを目的とする授業です。英語を正確に読む練習が中心ですが、単に受け身の学習ではなく、英語を使って必要な情報を調べ、リサーチで得た情報を分析・編集し、さらに英語のレポートとしてまとめて発信するなど、**能動的に英語を使いこなすうえでの基礎となるスキルの習得**が主な目的です。ディスカッションやグループでの作業なども取り入れますので、積極的に参加し、受講生同士の親睦も深めていただければと思います。

２．授業のテーマ

本年度の異文化理解科目では、「**グローバリゼーション**」と「**メディア・スタディーズ**」をサブテーマに設定しています。簡単に言えば、世界が複雑につながりあっている状況を、各種メディアがどのように表現しているのかを考えることで、現代における文化研究のあり方についての理解を深め、それを仕事や学業に活かしていくということです。「グローバリゼーション」と「メディア」そのものについて学ぶことはもちろん必要ですが、これらはそのまま扱うには大きすぎるテーマですし、そもそも言葉の定義自体が定まっていません。そこでこの授業ではまず、**グローバリゼーション研究（global studies）、メディア研究（media studies）**という比較的新しい学問分野の動向を押さえながら、そうした研究の方法論を知識として学びます。さらにそれを個別のテーマについてのリサーチに応用していくことで、よりリアルな体験として「グローバリゼーション」や「メディア」を理解するきっかけとしたいと思います。

授業全体としては、**“interconnectedness”**（相互につながりあっていること）というヴィジョンを常に意識しながら、英語圏の諸文化、またそれらの文化と日本の間にどのようなつながりがあるのかを調べていきます。個々の文化や個別の事象について調べる際であっても、それらは決して単独で存在しているわけではなく、常にそれ以外のものとの関係の中に置かれています。そうしたつながり合いを踏まえて、そもそも現代において「異文化を理解する」とはどういうことなのかを、改めてじっくり考えてみましょう。

３．成績評価

異文化理解科目は大阪大学の正規の授業ですので、修了時には大学から単位が発行されます。それに先立って受講生の皆さんそれぞれの成績評価を行いますが、その評価基準は以下の通りです。

- **平常点（出席、ディスカッションへの参加、課題・発表）　50%**
- **期末レポート（英語で作成し、電子ファイルとして提出）　50%**

これを合計し、100 点満点に換算して 60 点以上が及第点です。出席に関しては、**お仕事の都合などで欠席・遅刻される場合は必ず講師までご連絡ください**。事前に連絡があり、かつ正当な理由があると認められる場合は、欠席扱いとはしません。英語力やコンピュータ関連の技能には個人差がありますので、あくまでどれくらい努力したか、**最初と比べて相対的にどれくらい上達したかを個別に判定**し、成績評価に反映させます。したがって、「出来ない」「自信がない」「間違えた」などと気にする必要はありません。まずやってみて、失敗し、ゆっくり苦手を克服すればよいのです。

４．各週の授業内容

各週の授業は、講師による解説を交えた**英文読解**と、受講生の皆さんによる**プレゼンテーション**を中心に進めていきます。

＜授業内容＞

- **英文読解**――お渡しした資料を読み、内容や英語について確認します。質問やコメントを出していただき、それについてクラス全体で意見を交わしながら考えていきます。また関連する日本語の資料なども読み、さらに映像資料などを見ることもあります。
- **グループ・プレゼンテーション**――あらかじめ設定された題材について調べ、その結果を報告していただきます。発表は基本的に**日本語で**行います。またプレゼンテーション用ソフトを使用して、**発表用の資料も用意**してください。その資料は発表後に講師に提出していただき、クラス全員が閲覧できるようにします。
- **個人プレゼンテーション**――授業の内容を踏まえ、受講生それぞれが決めたテーマにしたがってリサーチを行い、その結果を発表していただきます。**授業期間中に必ず一度は個人プレゼンテーションを行うこと**が、受講するうえでの義務ですので、早めに準備を始めておいてください。なお個人プレゼンテーションは**全て英語**を用い、コンピュータで作成した**プレゼン用資料**を使って行います。使用した資料は発表後に講師に提出してください。許可があれば、クラスの皆さんにも見ていただけるようにします。
- **レポート作成・提出**――授業が全て終了した後一定期間内に、期末レポートを提出していただきます。形式は自由ですが、**英語で作成**することと、**電子ファイルにまとめてメールなどで提出**することがルールですので、入念に準備を行ってください。内容・テーマも自由ですが、これまではほぼ全員の方が、授業中に行った個人プレゼンテーションをもとに期末レポートを作成されています。授業期間の後半に、レポートと個人プレゼンテーションのテーマを考えていただく時間を設けますので、普段からトピックを探しておいてください。
- **音読・発音練習**――プレゼンテーションのための準備として、時間が許す限り英文の音読や発音練習も行っていく予定です。必ずしも「ネイティヴ」のように話せなくても不便はありませんが、できるだけ英語らしい発音に近づける努力は必要です。授業では、日頃から、そして授業が全て終わった後も独学で練習を続けていただけるように、英語発音の基本的なメカニズムや日本人英語学習者として知っておくと役に立つコツを紹介していきます。

５．授業で使用するもの

主なテキストは、毎週プリントをお渡し、同じものを WebCT からもダウンロードできるようにします。今回は購読用にやや長めの英文テキストをお配りしますが、それらは書籍からコピーしたものです。授業には、筆記用具や辞書類（電子辞書など）をお持ちください。また発音練習用にイヤホンもあるとよいでしょう。コンピュータは主にプレゼンテーションとその準備のために使いますが、その場で調べ物をしたり、メールを書いたり、さらに発音練習したりという用途もありますので、持ち込みまたは貸出しでひとり一台手元に置いておくようにしてください。WebCT は主として資料配布と発音練習のために使用します。プレゼンテーション用には Open Office の Impress という機能や、Google のサービスを使用します。また講師への連絡や課題提出などは、Gmail をご利用ください。

資料２　グループ編成と打ち合わせ

グループ編成のための参考データとしますので、以下の質問に自己診断でお答えください。回答は成績評価に関係ありませんので、正直にお答えください。

各設問の後の１～３のうち当てはまるものを選び、その数字を右のボックスに記入してください。最後に全１０問の合計点をいちばん下のボックスに書き込んでください。記入済みの用紙はいったん回収します。末尾にお名前と、授業で用いる Gmail のアドレスをご記入ください。

Q 1 : 英語は得意な方？				
	1. 苦手	2. 普通	3. 得意	点
Q 2 : 普段の生活で英語を使う？				
	1. 使わない	2. たまに使う	3. よく使う	点
Q 3 : 英語の文章を読むのは好き？				
	1. できれば読みたくない	2. 必要があれば読む	3. 進んで読む方だ	点
Q 4 : 英語で文章を書くのは好き？				
	1. あまり書きたくない	2. 必要なら書く	3. どんどん書いてみたい	点
Q 5 : 英語で会話やスピーチをしてみたい？				
	1. したくない	2. 必要ならしてもいい	3. 積極的にトライしたい	点
Q 6: コンピュータには詳しい？				
	1. 全く訳が分からない	2. 特に不自由なく使える	3. かなり詳しい	点
Q 7 : 普段の生活でコンピュータを使う？				
	1. たまに起動する	2. 用があれば使う	3. 用がなくても触っている	点
Q 8 : プレゼンテーション・ソフト（Power Point など）を使ったことがある？				
	1. 一度もない	2. 何度か使った	3. しょっちゅう使う	点
Q 9 : ネットを通じて人と交流するのが好き？				
	1. そのような経験はない	2. 付き合い程度なら	3. ネットが主な交流の場	点
Q 10 : 他の人と協力して作業するのは好き？				
	1. ひとりでやりたい	2. 気の合う相手なら OK	3. 仲間が多いほど良い	点

合計　　点

氏　名 _____

授業用 Gmail アドレス：_____ @gmail.com

資料３　その他

＜次週までにやっておくこと＞

●自己紹介の準備

次週の授業はじめに、受講生の皆さんに自己紹介をしていただきます。自己紹介は日本語でも英語でも良いですが、**一人あたり５分以内**に収まるようにしてください（コンピュータのセッティングも含む）。発表の際には、Google Document のプレゼンテーション機能か Impress を使い、教室の前のスクリーンに資料を表示します。簡単なもので結構ですので、あらかじめ資料を作っておいてください。もし可能でしたら、作成した資料のデータを、Impress であればメールで講師に送り、Google であれば共有設定をして講師にも閲覧できるようにしておいてください。

●購読用資料を読んでおく

本日、二種類の購読用資料をお渡ししています（冊子のもの）。

1. Patricia J. Campbell, et al., *An Introduction to Global Studies* からの抜粋（以下 *Global*）
2. Robert Kolker, *Media Studies: An Introduction* からの抜粋（以下 *Media*）

これらは授業期間の間に少しずつ読み進めていきます。指定された範囲を読み、よく分らない箇所、気になる箇所をチェックし、質問やコメントができるようにしておいてください。

次週までに読んでおくのは、

1. *Global* の１～６ページ（６ページ終わりからの囲み記事はざっと目を通しておく）
2. *Media* の１～３ページ３２行目（. . . they advertise. まで）

です。最初は少し大変かもしれませんが、多少文章の意味が呑み込めなくても、大まかな話の流れを捉えるようにしてみてください。

●グループ発表の準備

Global の中の一節を課題として割り当てますので、グループごとにその内容をまとめ、クラスの前で解説していただきます。発表の形式はお任せしますが、

１）プレゼンテーション資料をパソコンを使って作成し前のスクリーンに表示する

２）原文の重要な箇所を引用するなどテキストに即して説明する

３）メンバー全員が貢献できるように役割を分担する

の三点を守ってください。独自に調べたデータを盛り込んでいただいても結構です。また説明は基本的に日本語で行います。

今回課題として指定するのは、

1. *Global*　４ページ、“What We Talk About When We Talk About Globalization”（7 - 34 行）
2. *Global*　４～５ページ、“Globalization as series of social processes”と“Deterritorialization”
3. *Global*　５～６ページ、“Interconnectedness: the local and global”

です。各グループがこれらのうちの一つを担当することになります。初回ですので、ひとまず協力して準備する手順を確認しながらやってみてください。必要であれば、次回の授業中にも少し準備の時間を取ります。

異文化理解科目（英語）A　　第二週講義資料

グローバリゼーションとインド、スリランカ

＜授業のポイント＞
今回から購読用資料を読み始めます。前半は自己紹介とグループ・プレゼンテーションを中心に行い、後半はクラスで資料を読み進めていきます。追加の資料もお渡ししますので、目を通しておいてください。

１．自己紹介
・受講生それぞれが自己紹介を行う――プレゼン用資料を提示しながら、ひとり 5 分程度話をする
２．グループ・プレゼンテーション
・*Global Studies* の中の担当箇所について、グループで準備した成果を報告する
・それぞれの発表後に質疑応答を行う
３．資料購読　　（**資料１**）
・*Global Studies*, pp. 1-4 をクラスで読み、内容を確認する
・*Media Studies*, pp. 1-3 をクラスで読み、内容を確認する
・それぞれの資料についてディスカッションを行う
４．発音練習
・発音練習教材についての解説（教材の場所：WebCT の「Web リンク」内）
・前回配布した資料を見ながら、少し練習してみる
５．ケーススタディー　　（**資料２、資料３**）
・*Global Studies* と *Media Studies* で読んだ内容をふまえ、いくつかの事例について検討する
・カナダの作家 Douglas Coupland の小説 *Generation A* (New York: Scribner, 2009)より、スリランカの若者 Harj のエピソードを読む
・映画 *Slumdog Millionaire* (2008、イギリス映画)を観る
・リサーチ課題：インドとスリランカについて調べ、作品でのこれらの描かれ方について考える
５．次回の資料購読とグループ・プレゼンテーション
・次回までに読んでくる範囲は

Global：8 ページ“Compressing time”から 14 ページ“Politics”の前まで *Media*：3 ページ“Television's struggle. . .”から 6 ページ“. . . a major way”まで

・次回のグループ・プレゼンテーションは

１．*Media*：3 ページ“Television's struggle”から 4 ページ“this book”まで ２．*Media*：4 ページ“Definitions are needed”から 5 ページ“the mediation process”まで ３．*Media*：5 ページ“Take photography”から 6 ページ“a major way”まで

次回の範囲はやや長いので、発表時間は長めに取っても構いません。

資料３

＜作品について＞

映画 *Slumdog Millionaire*（邦題『スラムドッグ＄ミリオネア』）はインド人外交官 Vikas Swarup（ヴィカス・スワラップ、またはスワループ）の小説 *Q & A*（2005、邦訳『僕と１ルピーの神様』）を原作とする映画である。原作とはかなり異なる箇所があり、製作者による改変が問題とされた。イギリス人の Danny Boyle とインド人 Loveleen Tandan が共同で監督を務めた本作は、２００９年のアカデミー賞で最多８部門を受賞した。

Bombay（現 Mumbai）のスラム街で孤児として育った Jamal Malik が、インド版の『クイズ＄ミリオネア』（現地タイトルはヒンディー語で *Kaun Banega Crorepati*、英語タイトルは *Who Wants to Be a Millionaire?*）に出場し、あと一問で全問正解というところまで進む。無学な彼がそこまで勝ち進んだことで、番組サイドは不正が行われたと判断し、Jamar を警察に引き渡す。Jamar は尋問を担当する刑事（インドの大スターで国際派俳優である Irrfan Kahn が演じる）に過去の思い出を語り、それらの経験から得た知識が、たまたま番組で出されるクイズの答えと一致していたことを明かす。果たして Jamar は全問正解しミリオネアになれるのか、離れ離れになった初恋の相手 Latika との恋の行方は、そして犯罪の道に迷い込んだ兄 Salim との和解はなるのか、というところが見どころとなる。

今回は映画の初めの方を少し観て、その後にいくつか印象的なシーンをピックアップしていく。特に Jamar が刑事に語って聞かせる「リアルなインド」の姿に注目し、さらに『クイズ＄ミリオネア』というグローバルな娯楽番組が、インドのローカルな社会・文化との関係でどのように変化するのかを考えてみたい。

＜ディスカッションのトピック例＞

１．映画で描かれる「リアルなインド」とはどのようなものか？

２．Jamar の視点から見た、インド社会へのグローバリゼーションの影響とは？

３．メディアとしての映画やクイズショーが Jamar や他のインド国民に対して持つ意味とは？

４．映画『スラムドッグ＄ミリオネア』自体をメディア論的に分析すると何が言えるか？

異文化理解科目（英語）A　　第三週講義資料

各種メディアを通して見るグローバリゼーション

＜授業のポイント＞

今回はまず *Global* と *Media* を使い資料購読とグループ・プレゼンテーションを行います。その後にいくつかの短い英文を読み、グローバリゼーションとメディアの関わりについて考え、要点を整理します。その後でケーススタディーとして、写真と“acceleration”についての考察を読み、さらに経済のグローバル化をアメリカの視点から見た映画を観ます。

１．資料購読

・*Global Studies*, pp. 8-14 をクラスで読み、内容を確認する

・重要なポイントについてディスカッションを行い、Google ドキュメントで議事録を作成する

２．グループ・プレゼンテーション

・*Media Studies* の中の担当箇所について、グループで準備した成果を報告する

・それぞれの発表後に質疑応答を行う

３．グローバリゼーションとメディアについて　（**資料１**）

・いくつかの短い英文を配布するので、まずそれに目を通し、書かれている内容をイメージする

・これらの英文を読むことで、グローバリゼーションとメディアの関係について何が言えるかを考える（説明用の英文を続けて読んでいく）

４．ケーススタディー　（**資料２**、**資料３**）

・**資料２**の Richard Powers, *Three Farmers on Their Way to a Dance* (1985)からの抜粋を読み、写真というメディアと、「加速する変化のスピード」について考える

・ドキュメンタリー映画 *Capitalism: A Love Story* (2009)の一部を観て、アメリカにおける貧富の差や利益追求を善とする考えについて確認し、サブプライム問題との関連で、アメリカ発の経済不況が世界中に影響を及ぼすことの意味を検討する（**資料３**の補足説明も併せて読む）

５．次回の資料購読とグループ・プレゼンテーション

・次回までに読んでくる範囲は

Global : 14 ページ“Politics”から 21 ページ“In Focus”の前まで *Media* : 6 ページ“Traditional Studies of mass media”から終わりまで

・次回のグループ・プレゼンテーションは

Global : 18 ページ“Globalization processes”から 19 ページ“international chains”まで *Global* : 19 ページ“Others argue”から 20 ページ“devoted to spices”まで *Global* : 20 ページ“While there are”から 21 ページ“across the globe”まで

今回は内容説明だけでなく、本文にはない**具体的な例**も挙げながら話を進めてみてください。*Media Studies* の資料を読み終わりますので、次回追加の資料をお渡しします。

資料３

＜作品について＞

Capitalism: A Love Story (2009 年、邦題『キャピタリズム――マネーは踊る』)は、アメリカ社会の抱える矛盾を、皮肉とユーモア、アポなし取材をまじえて描き出すドキュメンタリー映画監督マイケル・ムーア（Michael Moore）の最新作。100 年に一度とも言われる米国初の世界不況の原因は、制御不能になった資本主義にあると考えたムーアは、サブプライムローン、住居の差し押さえ、富の独占、公共サービスの民営化などの問題を取材していく。取材の過程で資本主義は本質的に「悪」であるとされ、それを絶対的に「善い」ものと信じさせられてきたアメリカ国民の不満が、「農民一揆」として爆発する日も遠くないと予言される。映画の終盤では、オバマ大統領の登場を機に変化を求める動きが活発化する様子が描かれ、また 1930 年代の世界大恐慌のさなかに就任し、第二次世界大戦の末期に病死するまで大統領を務めたフランクリン・ローズヴェルトが果たしえなかった、「第二の権利章典」のことが紹介され、今こそ貧富の格差をなくし誰もが安心して暮らせるアメリカを作るために、資本主義のくびきから抜け出す時だというメッセージが発せられる。

＜鑑賞のポイント＞

今回は、アメリカにおいて資本主義と市場主義が絶対の価値とみなされるようになった経緯について解説してある箇所と、終盤のオバマとローズヴェルトの比較がなされている箇所を中心に観ていく。グローバル化する資本主義をコントロールする立場にあると思われがちなアメリカが、実はその弊害をもっともシビアに被っているということを確認しておきたい。また、今後読んでいく資料との関連で、アメリカ文化の特徴についても、映画を参考に考えてみたい。

マイケル・ムーアの作風は独特なものなので、メディア論の視点からも研究に値する。なかでも、映像アーカイヴから取ってきた写真やビデオを切り貼り（コラージュ）して、それをナレーションなどの音声と組み合わせる手法が特徴的である。どのような話の流れの中で、どのような映像と音声が組み合わせて用いられるかということは、話されている内容以上に観ているものの心情に訴える効果が大きい。アメリカでは人気のない社会主義者のレッテルを貼られることの多いムーアではあるが、その政治的信条だけでなく、ドキュメンタリー作家としての倫理を無視しているという点についても批判されることが多い。何を伝えたくてどのような手法を用いているのか、ドキュメンタリーというジャンルをどのように改変しているのか、インディ系の映画作家であったムーアがメインストリームに躍り出て、大手メディア企業から作品を配給しているという事実をどう捉えるべきなのか。マイケル・ムーアの新作というものが一種の「メディア・イベント」となっている現在、これらの視点から彼の作品と活動を再検討する必要があるだろう。

異文化理解科目（英語）A　　第四週講義資料

アメリカ社会・文化についての補足資料

＜授業のポイント＞
前回までの授業の流れでアメリカについての話題がいくつか出てきましたので、今回はそれらに関連する日本語の資料をいくつかお配りします。これらを読んで確認していきたいのは、１）グローバリゼーションについて考えるためには、逆説的にローカルな社会や文化について詳しく調べる（地域研究）必要があるということと、２）グローバリゼーションとアメリカナイゼーションの間の違いと両者の関係を明確にしておく必要があるということ、の二点です。*Media Studies* に続く購読用資料もアメリカの２０００年代についてのものを配布しますので、少しずつ読んでいきましょう。また、そろそろ個人プレゼンテーション＆レポート作成の準備を始めなければなりませんので、そのための時間も設けます。

１．英国人が見たアメリカにおける貧富の差　（**資料１**）
- 日本滞在経験があり日本社会についての著書（『「ニッポン社会」入門』）もある英国人ジャーナリスト、コリン・ジョイス（Colin Joyce）の『「アメリカ社会」入門――英国人ニューヨークに住む』からの抜粋を読む
- アメリカの「神話」とは何か、「アメリカン・ドリーム」とは何か、それらは世界にも類を見ない貧富の差というアメリカの現実とどう関係するのか、といったポイントを、映画 *Capitalism* と比較しつつ押さえていく

２．グローバリゼーションとアメリカ　（**資料２**）
- 幅広いフィールドワークを通してアメリカ社会・文化の実情を伝える、文化人類学者渡辺靖の『アメリカン・コミュニティ――国家と個人が交差する場所』を読む
- この分野（アメリカ研究、文化研究）についての基礎知識がないと分かりづらい箇所があると思われるが、どれも重要なものなので、英文購読用資料と関連付けながら、詳しく解説していく

３．個人プレゼンテーションの準備＃１
- 資料３を使いながら、個人プレゼンテーションの準備として、トピックとテーマを決めていく

４．次回の資料購読とグループ・プレゼンテーション
- 次回までに読んでくる範囲は

Global : 21 ページ“In Focus”から 27 ページ本文終わりまで
American Dreams : 367～373 ページ“1. The Changing Climate of Climate Change”と“2. The Golden Door—And a Concrete Wall?”

- 次回のグループ・プレゼンテーションは

American Dreams : pp. 367-69,“No American politician”から“their opposition”まで
American Dreams : pp. 369-70, “Yet as the evidence”から“Al Gore preached”まで
American Dreams : pp. 371-73, “For most of”から“the 2008 elections”まで

資料１

出典：コリン・ジョイス著／谷岡健彦訳『「アメリカ社会」入門――英国人ニューヨークに住む』（NHK出版生活人新書、2009 年）

A.

どんなに生まれが貧しくとも、富と名声を手にすることができる――アメリカ社会に流布するもっとも強力な神話のひとつだ。「神話」という言葉を使ったのは、べつにそれが真実ではないからではない。こうした立身出世の物語が何度もくり返し語られ、人びとの間に共通の価値観を植えつける役割を果たしていることを言いたいのである。

現代で言えば、フランク・シナトラ、オプラ・ウィンフリー、コリン・パウエルといったところが、そうした立身出世を成し遂げた人物の代表例だろう。ただ、彼らの成功譚を耳にするたび、ぼくの頭には、たいていのアメリカ人とはまったく逆の考えがよぎる。ぼくには、彼らは、ふつうの人が困難な境遇からトップにまで登り詰めるのがいかにたいへんかを示す例外的存在としか思えないのである。彼らのように成功できるのは、豊かな才能があって、努力を惜しまず、かつ運にも恵まれた、ごくかぎられた数の人でしかない。その他の大多数は、現実と折り合いをつけながら生きてゆかなければならないのである。

ところが、アメリカ人の多くは、こうした成功者の例から「この国では夢を持って努力をすれば、不可能なことはなにもない」と考えるようだ。残念ながら、こうした考えはアメリカの現実と一致していない。いや、それどころか、他の国々と比べて、アメリカではいっそう現実から乖離している。統計によると、アメリカの社会的流動性は、カナダやデンマークといった国々よりも「低い」。また、社会の所得分布図で、下から五分の一に属する層が階層上昇を果たせる可能性は、階級社会と言われるイギリスと比べても、アメリカの方がはるかに低いし、逆に上位五分の一がその階層にとどまり続ける率はアメリカの方が高い。つまり、アメリカ社会は全体として、あまり流動性に富んだ社会ではないのである。(……)

映画監督のマイケル・ムーアは、その著書『おい、ブッシュ、世界を返せ！』の中で、アメリカ人の能力主義信仰の歴史をたどり、その源流のひとつがホレイショー・アルジャーという作家にあることを突きとめている。アルジャーは、現在ではほとんど忘れ去られた作家であるが、全盛期の彼は、出版界ではまさに飛ぶ鳥を落とさんばかりの勢いの大スターであった。生涯に一三五もの小説を書き、一八六八から七二年にかけての五年間には、なんと一七作を上梓している。このように、矢継ぎ早に作品を発表できたのは、彼の小説の多くが、基本的には同じストーリーの変奏にすぎなかったためでもあろう。善良な少年が、自らの努力と幸運によって、困難な境遇を克服して金銭的な成功をつかむという話ばかりなのだ。彼の小説は、タイトルだけでだいたいの内容がわかる。『努力と成功　ウォルター・コンラッドの歩み』、『ホテルボーイのジョー　決意をもって成し遂げる』……。

今日、アルジャーの小説を読む人など、ほとんどいない。しかし、「ホレイショー・アルジャー神話」は、いまなお生き続けている。信念をもって事にあたりさえすれば成功できるのであり、それ以外の階級や人種といった要素は関係ないという考えは、アメリカ社会ではきわめて根強い。（89-92）

B.

アメリカ社会に巨大な貧富の格差があることは、よく指摘されている。しかし、ぼくにとって驚きなのはむしろ、たいていのアメリカ人がこの格差にいかに平気でいるかということの方である。アメリカ人の考えでは、誰でも人生のチャンスは平等なのだから、お金持ちはそれに見合う努力を積み重ねてきたのだろうし、貧しい暮らしをしている原因はその人自身にあるということになるのだろう。自分が成功できたのは、恵まれた条件、たとえば親に資産があって教育に十分な費用をかけてもらえる環境で育ったことのおかげも大きいなどと考える人はあまり多くない。

定収入にあえぐ人びと自身も、富裕層に対して驚くほどやさしい。と言うのも、彼らは富裕層の暮らしぶりを、自分もしくは自分の子どもたちがいつの日にかたどり着ける目標と見ているからである。これまで、読んでいてもっとも痛ましい思いをした本の中に、『ニッケル・アンド・ダイムド　アメリカ下流社会の現実』という本がある。ジャーナリストのバーバラ・エーレンライクが、ウェイトレスやスーパーの店員、清掃員といったアメリカの低賃金労働者の実態をルポしたものだ。七ドルにも満たない時給で郊外の豪邸を掃除するという仕事を、自分も実際にやりながら、エーレンライクは、なんの保障もなしにこき使われている同僚に向かって「この部屋の持ち主に嫉妬しないか」と尋ねる。同僚の答えはこうだ。「わたしが思うのは、ああ、いつかこんな部屋に住んでみたいってことだけね。それで仕事をやる気がわくし、反発は少しも感じない。だって、こんな暮らしをするのが、わたしの夢だもの」。しかし、この本を通して読めば、彼女が最低限度の水準の生活をすることすら困難なことが、痛々しいまでに明らかになるのである。

ぼくは以前、アメリカ人の友人に、誰にでもお金持ちになれるという考えのおかげで力がわくこともあるものなのか、はっきり口に出して聞いてみたことがある。何事にも自信を持てず、消極的な人も、こうした考え方に立てば、前向きに挑戦してみようという気持ちになるかもしれない。彼は「たしかにそうだ」と答えた。しかし、同時に人を追い詰めもするとつけ加えた。現実には、生来の才能や環境に恵まれず、裕福になれる可能性などないに等しい人は大勢いる。そんな人たちまで、お金持ちになれない自分を失敗者だと思い込んでしまうというのである。

また、郵便配達やゴミ収集といった社会生活上、不可欠な仕事は、必ず誰かがやらなければいけない。だが、アメリカ社会ではどうも、このような当たり前の事実への理解が欠けているようだ。社会の誰もが弁護士になれるわけでもないのに、こうした仕事に従事している人々に対する感謝の念が薄い。それどころか、どこか見下すような態度さえ感じられるのである。(92-94)

資料２

出典：渡辺靖『アメリカン・コミュニティ――国家と個人が交錯する場所』（新潮社、2007 年）

C. 個人主義とコミュニティ

近年、日本でも格差拡大が懸念されているが、アメリカの現実は遥かに凄まじい。

二〇〇六年には、アメリカの大富豪ウォーレン・バフェットが個人資産の八五パーセントにあたる三百七十億ドル（約四兆五千億円）をビル・ゲイツ夫妻の財団などに寄付すると報じられた。“The New York Times”（二〇〇七年三月二十九日付）によると、上位一〇パーセントの富裕層が所得全体に占める割合は四八・五パーセントとほぼ半数に達し、富裕層のみの所得が一割増となった。

一方、米住宅都市開発省は、公園や道路などで寝泊まりしているホームレスが、推計で七十五万人に達していると発表（二〇〇七年二月）している。単純に比較はできないが、その数は日本の約三十倍に相当する。ロングビーチ（カリフォルニア州）の公立高校を舞台にしたハリウッド映画『フリーダム・ライターズ』（二〇〇七年）の世界を地で行くような、貧困、ドラッグ、人種差別、ギャング抗争、学校崩壊の連鎖を見聞きすることは決して珍しくない。

資本主義や市場主義が生み出すこうした経済格差に加えて、日本の二十五倍もの広大な土地面積、変化に富む地質と気候、独自の憲法を有するほど自律性の高い五十州と海外領土、そして世界有数の多民族国家としての言語・民族・宗教的な多様性など、日本とはスケールの異なる「差異」がそこには存在する。文化においても、世界に冠たる高級文化がある一方、大衆文化があり、洗練された知性主義がある一方、インテリを蔑むような反知性主義がある。こうしたアメリカにおける振れ幅の大きさは、アメリカを理解しようとする者をときに感嘆させ、ときに困惑させる。

このようなダイナミックな差異や格差が社会に存在する以上、強力かつ抑圧的な社会統合は自ずと困難であり、より緩やかで分散型のガバナンスにならざるを得ない（建国以来、連邦政府の機能や権限を制限してきた経緯も存在する）。そのことは、単一の価値やシンボルの共有を困難にすることを意味すると同時に、二つの含意を持つ。

一つは、アメリカにおける「個人主義」を促す文化的土壌として、社会全体が一定の方向のみに収斂することを防ぐ――つまり「振り子」を可能にする――という点である。アメリカの個人主義については、近代的自我としての側面、プロテスタンティズムの影響など、さまざまな背景が存在するが、社会統合の困難さの帰結としての側面も看過できない。

もう一つは、やや逆説的であるが、社会統合の困難さゆえに、社会をまとめるメタ言説――つまり「大きな物語」――を渇望する点である。「大きな物語」は、例えば、「自由」や「平等」、「民主主義」といった近代的理念、「多様性のなかの統一（多から一へ）」や「アメリカン・ドリーム」といった社会的理念、「丘の上の町」や「地上で最後で最良の希望」といったアメリカ例外主義・選民思想的理念などが挙げられる。そして、それはさまざまな状況に応じて使い分けられ。独立記念日や大統領の就任演説などは典型的な発話の場だが、同時多発テロやイラク戦争などの有事も社会統合にとって重要な機会をなす。

（225-27）

D. グローバル化と〈帝国〉

今日のグローバル化は「資本」と「市場」、そして「情報」のユビキタス（遍在）化を特徴とするが、運動力学としては二つの動きを有する。一つは、近代化がさらに進むこと。つまり、スーパーモダンやハイパーモダンの動きである。もう一つは、近代化と密接に結びついてきた「国民国家」の機能や権限が揺らぐこと。つまり、ポストモダンの動きである。

グローバル化には「アメリカ化」の側面もあるが、それは必ずしも一方通行的なものではない。ある意味では、アメリカほどグローバル化の挑戦を受けている社会もない。不法移民や頭脳移民の大量流入、感染症や違法薬物、国際組織犯罪。雇用の海外流出や労働ダンピング。エネルギー資源から情報技術、知的財産、高等教育、スポーツ、ポップカルチャーに至るまで、アメリカもまた厳しい国際競争の圧力にさらされている。（……）

スーパーモダンやハイパーモダンとしてのグローバル化は、社会の紐帯や境界線、規範、互恵関係のありかたに、少なからぬ修正を迫るものである。そうした揺らぎのなかで、個人の裁量の余地は大きくなり、かつ、個人への重圧も増すことになる。「自己責任」や「自己規律」「自己点検」「自己評価」といった「オーディット文化（audit culture）」――自分で自分を監視・評価し、外に対して開示義務を背負わされること――を支える言説の増大はグローバル化と無縁ではない。

一方、ポストモダンとしてのグローバル化は、「国民国家」という物語を揺さぶる分、その反発としてのナショナリズム、ないしは集合的な帰属や意味への衝動を強くする。そこでは、「ボーダーレス化の時代」という語りとは裏腹に、新たな差異や境界線が作り出されるとともに、伝統回帰や保守的転回、原理主義への誘惑が増すことになる（その意味において、グローバル化が「国民国家」の論理をむしろ強力にし、「国民国家」により承認・維持・推進されてゆく面があることは矛盾しない）。（……）

資本主義や市場主義がアメリカ社会を覆う状況は、アントニオ・ネグリ＆マイケル・ハートが提示した〈帝国〉を想起させる。それは帝国主義の〈帝国〉ではない。〈帝国〉とはグローバル資本主義の新たな支配のあり方であり、「領土や境界をもたない、中心をもたない、国民国家をも包摂する新たなグローバルな権力ないしはネットワーク」と指す。ネグリ＆ハートはアメリカが帝国主義的であること、そして〈帝国〉において優越的な位置を占めていることを認める。しかし、〈帝国〉はさらにアメリカをも包摂するものであり、アメリカでさえ、そこから自由ではいられないとしている。それゆえ、例えば、イラク戦争に象徴される一国中心主義・帝国主義的手法は、〈帝国〉においては破綻を運命づけられているという。

ネグリ＆ハートが〈帝国〉におけるアメリカの優位性を認める理由は、「ネットワーク上に配分された権力」という〈帝国〉の支配形態の系譜が、アメリカ合衆国憲法の歴史に実在してきた点にある。合衆国憲法には、広く配分され開かれた権力のネットワーク、そして異種混交的なアイデンティティへの承認が内包されている。その点が、グローバル資本主義の拡張におけるアメリカの優位性を担保するというわけだ。（230-33）